2001. 10. 10

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

JALD 日本LD学会会報 第38号

事務局：栃木県カウンセリングセンター内
〒320-0851 宇都宮市鶴田町687-9 ムギショウビル2F TEL.028-649-0090 FAX.649-1213
URL. http://wwwsoc.nii.ac.jp/jald/

気づきを促すために

明治学院大学
緒 方 明 子

会報第36号の巻頭で、宮尾先生は、成人の方の相談が多くなっていることをご指摘されました。私もやはり年齢が高くなるまで特別な援助を受けることがなかった人たちのことが気になっています。

先日、公立の普通高校で実に様々な学習上の困難さを示す生徒に出会いました。アルファベットが読めない、自宅から面接に行った会社までの経路を書くことができない、分数がわからない等々、基礎学力が未習得であるだけでなく、学習態度や学習意欲、社会的行動の面でも援助が必要な生徒が多数在籍していました。このような生徒を教える先生方は、教科書はほとんど使用せずに、手作りのプリントを用意し、ていねいな授業を重ねることによって生徒の参加を促し、理解を助けていました。高校生になって初めて分数や少数の意味を理解した生徒もいました。「わかった」、と言ったその瞬間に立ち会うことができたことは、大きな感動を覚えた瞬間でした。この生徒にとって、高校2年生になった今が、分数と少数を理解できる段階に達したということなのかもしれません。しかし、この生徒が過ごしてきたそれまでの算数と数学の時間はどのような時間だったのでしょうか。

高校生になるまでこのように様々な学習上の困難さをもち続けている生徒にとって、それまでの学校生活や授業はどのような時間だったのでしょうか。生徒自身が固有にもっている困難さのために学習につまずいたのかもしれませんが、その子どもに合った教え方や教材の工夫が十分になされていなかったのかもしれません。それよりも、子ども達の困難さに、誰かが果たして気づいていたのでしょうか。単に、勉強嫌い、怠け者、勉強が苦手等とみなされて放っておかれたのではないでしょうか。これは、子どもがもつ困難さの本態に気づくことができなかった大人の責任であると思います。子どもが抱えている困難さに気づくことができる大人が増えていくことが必要であり、急いでそのような大人を増やすような活動も学会の役割の一つだと思うのです。